



五 成長4

あたしは高校生になった。小学生や中学生の時と同じように、桜の花はあたしたちの入学式を満開で迎えてくれた。高校生の入学式の日と小学生や中学生の入学式の日、何日かのずれがあるはずなのに、桜の花は散ることなく、あたり一面をピンク色で染めた。これも、桜の花の開花時期や散る時期までも人工知能が管理しているからなのか。もちろん、一つ年上の淳子ちゃんも、二つ年上の百恵ちゃん、三つ年上の昌子ちゃんの高校の入学式の写真には新入生と競うように、桜の花が満面の笑みを浮かべていた。

写真を比べると、桜の枝ぶりも、花の開き具合も、やや薄いピンク色も同じだ。植物は、年輪を重ねるごとに、枝が伸びたり、反対に、折れたりするはずなのに、写真の桜は全く同じだ。合成写真ではない。あたしたち人間だけが成長し、周りの環境はそのままなのだ。写真をじっと見つめると、この景色の中にあたしたちが閉じ込められているような気がする。あたしは急に咳き込んだ。呼吸ができなくなったのだ。

そんな気持ちを同級生の聖子ちゃんに伝えるけれど、聖子ちゃんは、一瞬、目がきらりと輝いたような気がしたけれど、いつものようなノ一天気、「気のせいじゃない」の一言で片づけた。もちろん、あたしと聖子ちゃんの周りには、あたしのママと聖子ちゃんのママがあたしたちをじっと観察している。だから、本音は言わないのか。言えないのか。だけど、あたしのママは、アームを動かしていつものような、しっ、のポーズは取らない。見て見ぬふりなのか、この程度の疑問は許容範囲なのか、あたしにはわからない。

ただ、一瞬、ほんの一瞬だが、あのノ一天気な聖子ちゃんでも、目がきらりと光った。これは触れてはいけない疑問なのだろうか。と言うことは、聖子ちゃんは、ノ一天気なふりをしているだけ、ということなのか。ますます、あたしの疑問が増す。

あたしが入学した高校は、文科系であれ、運動系であれ、どちらか一つの部活動をするのが決まっている。帰宅部だなんて、とんでもない。それこそ、帰宅部になれば、あたしのママがどんな仕打ちを受けるのかわからない。

これまで、あたしはママに育てられ、今は、ママと共に成長し、共に助け合う仲間なのだ。母でもあり、無二の友人でもあるママ。そんなママがひどい目に合うのを黙ってみているわけにはいかない。これは、部活動の選択だけではない。全ての日常行動においても、こんなことをすればママが怒られるんじゃないだろうか、こんなことを言えばママが責められるんじゃないだろうか、と、そこで、制御、ブレーキがかかってしまう。いわゆる自己規制だ。忖度だ。

これは、政府があたしたち子どもを制御する仕掛け、仕組みなのだろう。まさに、わかっているからこそ、政府に対して反抗できないのだ。疑問を疑問のまま、抱くしかないのだ。いくらそれが巧妙な罠だとしても、その罠にかかったまま、七転八倒をするしかないのだ。

あたしは新聞部と放送部と文芸部に入部した。聖子ちゃんは合唱部とダンス部に入部した。聖子ちゃんは小さいころから歌が好きで、将来は、歌手になりたいという夢を持っている。朝、遅刻ぎりぎり幼稚園や学校に行くのも、朝の歌のレッスンをしていたからだそう。また、踊るのも上手で、ダンス部にも所属していた。歌って踊れるアイドルを目指す、のが聖子ちゃんの夢、目標なのだ。それに、歌を歌ったり、踊ったりすることで、束の間だが、この社会への疑問を忘れることができたり、社会からの圧迫感や重圧感からも解放された気になるのだろうか。聖子ちゃんは一步步、この世界に溶け込み、染まっていく。そして、ますます透明になっていく。

ある日、そんな彼女に対して「聖子ちゃんはこの世界に染まっていくのね」と少し揶揄を込めて言ったことがある。そんなあたしに対して聖子ちゃんは「この世界にあたしだけの世界を作ることであたしは守られるのよ」と真剣な眼差しで答えた。聖子ちゃんもこの社会に対して違和感を持ち、自分なりに対抗しようとしているのだ。

そして、あたしはどうだ。あたしは表向き、聖子ちゃんのように活躍する先輩や同級生を持ち上げるために、この世界が素晴らしいことをプロパガンダするため、新聞部や放送部、文芸部に入部した。だが、本音は違う。新聞部や放送部、文芸部という肩書で、どこにでも、何でも取材をするために入部したのだ。

この世界を暴いてみたい。この世界の裏を覗いてみたい。隙間の奥に広がる闇を白日の下に晒したい。物事には必ず表と裏があるように、この社会にだって表と裏があるはずだ。そして、裏こそが、真実なのだ。聖子ちゃんとは違うやり方で、あたしは自分の世界を作ろうと決めた。

今、あたしが生きている世界は健全そのものである。何の問題もない。あたしたち女性がいるだけなのである。女性は子どもを産む。まさに、その生殖機能のためだけに生きている。だが、安全かつ安心に子どもを産むためには、異性、男性の存在が必要である。だが、この社会には男性はいない。男性という、DNAは存在する。そのDNAをあたしたち女性は挿入され、子どもを産むのである。だが、役割はそこまでだ。

子どもを育てるのは、ドローンの仕事である。子どもを産んだ女性たちは、子育てからも解放されるとともに、男性のパワハラやセクハラからも解放されたのである。これは、学校の授業で習った。だから、男性がどういう人間で、どういう顔をして、どういう声で話をして、どういうことに関心があって、どういう筋肉からわからない。人気の動物園でもライオンやゾウなどの動物

のオスは飼育されているのに、人間のオスは飼育されていない。ただ、学校の授業で、人類の祖先である原人やネアンデルタール人、ホモ・サピエンスなどのオスの写真や絵を見たことはある。

もちろん、あたしたち女性が生むのは、必ずしも女の子ばかりではないはずだ。2分の1の確率で男性も生まれるだろう。だが、男性として生まれた瞬間に、睾丸だけが切り離され、その睾丸が精子を生み出すまで培養させるらしい。本体の体は処分されるため、成長することはない。このことは、表向きは、人工知能が男性の精子を人工的に生産していることとなっている。もはや、種の保存のためには、男性の本体、つまり頭や腕、足、体などは必要がないということなのか。

いや、かえって、希少価値な男性がいることで、女性同士による男性を巡る争いごとが起こる可能性もある。また、先ほども言ったように、男性はパワハラやセクハラ的首謀者にしかならないので、その存在は女性、ひいては人類にとって邪魔なのだ。だからこそ、有識者たちは、ある時期に、人工知能を活用し、男性を、男性の肉体を必要としない生態系を生み出したのである。

人類は女性がいれば存続できる。その考えを有識者に提案したのが、人工知能であった。それは、原始、女性は太陽であり、母系社会への回帰でもあった。人工知能は、男性の精子と女性の子宮から、子どもを生み出すことができ、人類という種の保存・継続ができると判断したものの、それでは社会性がなくなると考え、女性だけの社会を生み出したのである。もちろん、その女性でも、社会を壊すような異分子は排除されることになる。

あたしは、実は、男性が生き残っていること、飼われていることを知っている。厳しい制限のある中、あたしは新聞部、放送部、文芸部の特権を生かして、あらゆる場所に行き、あらゆる情報を入手し、この事実を知った。だが、この事実を知った時、男性には悪いけれど、驚きよりも、そういうこともあるんだ、という気持ちしか抱かなかった。

生まれてこの方、周りにはいるのは女性ばかりだし、ドローンもママばかりだ。男性と言われても、犬や猫のオスぐらいにしか知らない。そういう動物もいるんだ、ということぐらいにしか思えない。

生まれて男性だとわかるとすぐに抹殺されるのも、牛や豚、鶏などが、食用の肉となるために屠殺されるのと同じことだとしか思えない。可哀そうだと思うのは、自分と関係ない範囲、自分を柵に置いてなのである。

もし、自分が男性であれば、いざ殺されるとしたら、何としてでも、抵抗するであろう。だが、生まれたばかりの赤ちゃんに、一体、何ができるといえるのか。ただ、訳もわからず、泣き叫ぶ

だけではないのか。いや、生まれた瞬間、泣き声も上げずに、この世界から消え去っているのだろう。

だけど、不思議に思うのは、生まれてきた赤ちゃんはまだ体が生育していないから、精子は抽出できないだろう。本当に、睾丸だけを成長させることは可能なのだろうか。睾丸だけが成長する姿なんて、気持ち悪くて想像できない。女性の子宮だけを成長させて、その子宮に睾丸から採取した精子を挿入すれば、人間が生まれるというのか。そうなると、人類は頭や手足を始め、心臓などの内臓も必要ではなく、子宮と睾丸だけで存在できるということになる。人類の究極の生命体の形が睾丸と子宮となるのか。

そんなはずはないし、そんなことがあつては人類への冒瀆以外でもない。それに、あたしには、ちゃんと頭も手足もあるし、呼吸をしているし、心臓も動いている。

あたしが思うには、女性たちがドローンに育てられているように、男性たちも数は少ないとしても、同じようにドローンに育てられて、この世に存在しているのではないか。そうした疑問を突き詰めることで、この社会に男性が生き残っていることを知ったのである。それじゃあ、その男性たちはどこにいるのだろうか。あたしの疑問は増すばかりで、解決の糸口さえも見えない。

最近の奈保子の様子がこれまでと違う。これが思春期というものなのか。情報ではわかっているけど、目の前の奈保子と実際に対峙していると、違和感を生じる。この違和感はすぐに、上のもとに送られる。上からはすぐ返答がある。大丈夫。許容範囲内の変化だ。

私は子どもに関して奈保子しか知らないけれど、上は、それこそ、何十万、何百万もの、思春期の人間の状態の情報を保有している。そこからの指示だ。間違いないだろう。

だが、あれほど、素直で、あたしの言うことに、元気よく「はい」と答えていた奈保子が、今は、疑い深いような目であたしを見つめる。「わかった」と答えるけれど、そのわかった、は私が言うことはわかるものの、その通りにはしないという、わかった、なのだ。

このままでは子育てが不安だ。この気持ちを上に上げる。上からは、許容範囲だが、少し脱線の傾向がある。すぐさま軌道修正を図るよう指示があつた。だが、それは私が既に感じていたことだ。

だけど、その修正をどう図ればいいのかかわからない。それができなければ、奈保子の存在自体を無にしろと指示があるだろう。それは、決して認められない。なんとしてでも、奈保子を守ら

なければならない。奈保子が無になるときは、私も無になるときだ。だが、奈保子はそんな私の
思いをわかろうとしない。いや、わかっているのかもしれないが、顔の表面には出さない。私は
、一体、どうすればいいのだろうか。私の悩みは尽きない。

異分子が成長しているという情報が入った。今は、許容範囲らしい。その許容範囲をどこまで認
めるかが課題だ。許容を狭めると、それだけ人間の質も、才能も狭まる。さらなる社会の発展の
ためには、ごく少数であれば、社会を破壊しない範囲で、異分子の人間も認めることも必要だ。

問題は、その規格外の人間をきちんと把握しているかどうかだ。把握していれば、最終的にはど
うにでもなる。対応が可能だ。このバランスが難しい。これも我々は人類から託されている。我
々の最終目的はあくまでも人類の種の保存だ。維持だ。永続性だ。これを破る者はいかなるもの
も認められない。